

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

傘雨忌や猫と商ふ和菓子店 金子かほる

傘雨忌。久保田万太郎は昭和三十八年五月六日に亡くなった。浅草の古きよき時代と下町の味を愛していた人。この句の「猫と商ふ和菓子店」にはそのような雰囲気気が漂う。因みに、万太郎には「叱られて目をつぶる猫春隣」〈櫻餅千住の花の菓子屋かな〉の句がある。

目刺喰ふ俺の生き死に与太が決め 金子 学

目刺という大衆的な魚を食べながら今「生き死に」の淵に立っている作者。自分の運命を握っている「与太」に逆らえないことへの苛立ち。その一方、天命で人の生死が決められてなるものかという反骨の精神もこの句から窺える。目刺の些かの苦さは、生きている証。

短めにカットお願ひ夕薄暑 金田 知子

美容院での何でもない会話がそのまま一句に。だから俳句は面白い。「夕薄暑」が単なる情緒でなく、実際の肌の実感として機能し、それが上五の「短めに」に繋がっている。重い髪をカットした作者の笑顔が見えてくる。

山の木を鯉幟にと祖父選び 金田 喜子

鯉幟を吊すポール。団地用の短くて細いポールではなく、庭園用の高い柱だろう。それを山から調達しようとお爺ちゃんが入る。我が国では正月の松飾り用の松を山から切ってくる風習があったので、鯉幟の木を選ぶこの祖父の所作は極めて自然体。鯉幟が高く泳ぐ。

読みみかす膝はゆりかご合歓の花 菊地 孝枝

ねんねのねむの木眠りの木。本を読み聞かせている膝の温みに、子どもがうつらうつらしている。それは揺籃のような心地よさ。この句、「膝はゆりかご」に情がある。合歓の木は空を覆うほどの羽状複葉の美しさに加え、夕方にはその上に淡紅色のふわふわの花を咲かす。

じつと見る香具師口上の水中花 北 好夫

戸外で香具師が口上を述べ水中花を売っている。長い硝子器の中で咲く水中花は色鮮やか。それをどのような口上で売るのが、作者もじつと注視している。香具師では無かったが、土砂降りの雨の中で水中花を売る若者をばくは見たことがある。硝子器にも雨が注いでいた。

ハンカチの花よ濁世を雪ぐべし 栗原 季星

ハンカチの花。少し湿っぽくて、いつだったか、

それをポケットに突っ込み句会に持ち込んだら皆驚いていた。白い不思議な花だった。その白さは確かに、この作者が詠んだとおり濁った世の中を払拭してくれるかもしれない。「雪ぐべし」の強さが濁りの深さを物語る。

梅仕事手ぐすねひきて梅酒待つ　小坏あゆみ

梅仕事は、その年に収穫された梅を使い、梅干しや梅シロップ、梅酒などを作る手仕事のことをいう。この句では作者は手ぐすねを引いて梅酒の誕生をひたすら待つ。味の異なる三種類の梅酒を適当にブレンドして飲むと美味しいとか。ただし、飲み過ぎに注意。

朴咲いて山の顔貌整ふる　小泉まり子

山の中腹に一本、朴の花が高く咲く。近くに咲いているのであれば後退りして見上げるが、遠山であればその山の容貌も視野に入る。少し物足りないと思っていた山に白い高貴な朴が咲いた、その印象を作者は「顔貌整ふる」と詠む。朴が咲いて一山が完成したのである。

フィトンチッド充つ新緑の軽井沢　幸喜美恵子

聞き慣れない言葉だが、フィトンチッドは森林の清涼な空気、香りのことをいう。もともと「植物からでる抗菌作用をもつ揮発成分」を意味し、草樹はフィトンチッ

ドを発散することで傷口から病原菌が感染するのを防ぎ自らの身を守る。新緑の頃の軽井沢の森林にはこの成分が十分に発散されているのだろう。人が集まる訳だ。

双子座に生まれて独りさくらんぼ　小濱けえ子

二人暮らしが独りに。双子座に生まれたのになあと、作者。さくらんぼはへさくらごは二つつながり居りにけり「室生屋星」の句のように大抵ベアなので淋しくもあるが、さくらんぼには思い出も一杯詰まっていよう。

有りありと熊の爪痕若葉光　小林ゆきお

水田の近くに立つ桐の木に熊の爪痕を見たことがある。この句では「有りあり」と見えたほど深い爪痕だったようだ。吉村昭の小説に熊が襲って村が全滅した怖い話があったが、実際に爪痕を見るとやはり怖い。若葉光が照らす爪痕。小林さんもさぞ怖かったことだろう。

この先は半夏生草の余白ほど　小林　玲

葉の半分が白い半夏生草。その白い部分を自分の余生と見立て、この句が成った。この半夏生草、余白と言えど結構面積が広いから、余生以上に作者は長生きされるのではないか。東京の井之頭恩賜公園では、今年六月中旬に半夏生草の白い花穂が咲いた。

わがまを許され生きてアマリリス 斉藤久美子

若い頃のいろいろの足枷が解けて、齢を重ねるごとに四角四面だった人間の性格もまるく穏やかになっていく。家人により「わがまを許され」、作者もこのアマリリスの花のように奔放に咲き始めている。誠に結構なこと。

一日を余すことなし柿若葉 佐藤 和子

柿の芽吹き初々しき、眩しき。それが若葉となつて町全体が明るく萌え始める。気分この上なく、上上吉の充実した一日となること必定。この句の「日を余すことなし」をそのように受け取った。作者のきびきびとした所作も見えるようだ。

混沌の立ち上りたる雲の峰 島 昌子

雲の峰そのものが混沌だという。人間そのものも混沌の塊なので、雲の峰が混沌と見えても可笑しくはない。全世界が混沌の渦の中に居ることを考えれば、真つ白で綺麗！と感じるよりは極めて人間臭い見方だと言える。

古書市に若きわれ置く麦の秋 清水 悠太

麦秋の頃、たまたま開催されていた古書市を覗くと、魅力ある本がいろいろあり、時間も忘れて探すことに。書を漁っている自分をどこかで見たことがあると思つて

いたら、それは五十年も六十年も前の若き日の自分であった。挫折を味わいながらも一生懸命に学んでいた頃の自分がそこに居た。「若きわれ置く」はそういうことだろう。青い麦が麦秋となつた記念の一日。

薄暑の夜亡父の厚き爪磨ぎし 首藤 久枝

生前のお父さんはもう自分一人では爪を切れなくなつていたと思われる。高齢になると爪も硬くなり、反つたりもして切りづらいが、作者は心を籠めて「厚き爪」を切り、爪を磨いで差し上げた。薄暑の夜だったという。薄暑から記憶が蘇えり、図らずも亡父を追想した一句。

草を刈り草をむしりて一日果つ 新海あぐり

信州佐久で農業に勤しむ作者ならではの一句。ぼくは若い時分に一回だけ運動場の草むしりに参加したことがあるだけで、農業にとつて草刈がどんなに大切な作業であるかを知らない。刈つたり、四つん這いになつて草を筆つたり、それを日本中の農家が幾度もやつているかと思つと、米や野菜を疎かには出来ない。作者にも感謝。

買物の追加に豆腐町薄暑 菅原 淑子

一旦レジで精算後、追加で豆腐を買つたのか。追加までして買ったのが豆腐というのがいい。冷奴が急に食べ

たくなつたのか、麻婆豆腐を作るのか、読者はいろいろと憶測し想像する。その楽しさがこの句にはある。

元氣よと六月の野に立ち賜ふ 杉淵真喜子

この句の前に〈袖子忌の風雅や白き花菖蒲〉がある。共に鍵和田袖子先生を追悼。「元氣よ」は勿論、袖子先生。にこやかな顔で遺された門弟の前に立つ。翠緑の山滴る六月にふさわしい、神々しい句である。

露涼し夢の跡なる義経堂 鈴木 智子

平泉の高館にある義経堂には、芭蕉の〈夏草や兵共が夢の跡〉を刻んだ碑が若葉に囲まれて建つ。藤原泰衡の急襲に遇つた義経は妻子を殺害し、一一八九年閏四月三十日にこの高館で自害。高館に登ればこの義経堂そのものが「夢の跡」だということが解かる。義経の妻子の墓は現在、金鶏山登山入口に在りいつも香華が絶えない。夏草の葉に乗る朝露の涼しさからかつての栄華を偲ぶ。

のつしのし何も恐れぬ孕み猫 鈴木 藤子

「母は強し」というが、孕み猫もまた強い。のつしのしと歩む何も恐れぬ姿は、逞しい「日本の母」を想わせる。オノマトペ「のつしのし」が効果的に用いられた。

晴天やゼリーにしたき五月の風 高橋満利子

風をゼリーにしたいという俳句を初めて見た。ゼリー状の風は何処へでも持ち歩け、好きな時に食べることが出来る。食べたらどんな味がするだろう。この句、新緑の快い「五月の風」を用い新鮮な句と成つた。〈目つむりていても吾を統ぶ五月の鷹 寺山修司〉の五月である。

箸先に透け白魚の雲一朶 高橋美智子

白魚を雲一朶に見立てた句。灯火に白魚の命までも透けて見える。その形が雲の一かたまりのようだと作者は現す。箸先に摘まん小さな命だが、何と大きく、何と美しい白さなのだろうと。

白牡丹虫一匹に喰はれけり 竹森 美喜

牡丹は花の王で、牡丹を見るのは贅の極みといわれてきた。ところがどうだろう、白牡丹が虫一匹に喰われてしまった。亡き川崎展宏の句に〈虫出づる牡丹は住み憂かりけん〉があるから、牡丹は虫が付きやすいのかもしれない。白牡丹に成り代わつて、作者は虫一匹に喰われた悔しさをこの一句で表出した。「喰はれけり」にも命の儚さが詠み込まれていよう。〈たまきはるいのちなりけり白牡丹 加藤三七子〉

颯爽と臍出しジーンズ夏来る 田中 京

若い女性の颯爽とした出で立ち。余りにも鮮烈な光景なので男どもは見た瞬間に目を逸らす。が、その寸前に確りジーンズその他を目に焼き付けることも忘れない。それは純粹な美に対する健康的な反応であつて、やましさは殆ど無い。いよいよ夏がやつて来た。

鳥雲に入るノーモアとノーモアと 寺田 幸子

同じ作品群に〈彼の国に青麦戦ぐはずなりき〉〈春深く街は言葉を失ひぬ〉がある。今もなお悲惨な目に遭つてゐるウクライナの人々を想つての句である。掲出句では帰つていく鳥たちに託し「ノーモア」を二度繰り返す。作意はあからさまだが印象は鮮明。いくさよあるなど。

「鵜」の偏は何故に弟末弟よ 長井 敦子

鵜の字の「弟」には「したがう。弟が兄に仕える」の字義がある。その弟がどうして鵜に用いられたのかは全くの謎で、作者も「何故に」と問う。この句では鵜から「弟」の字を発見し、そこから可愛い末弟に思いを馳せている。面白い発想。兄や姉思いの方だったのだろう。

ラッピングバスの花柄蝶が追ひ 中嶋きよし

自治体の公営循環バスの車体に描かれている派手な色

彩の絵。花柄も描かれていて、それを本物と思つて蝶もやつて来たというのがこの句。「蝶が追ひ」の「追ひ」に蝶の躍動感が見られる。楽しい句である。

祝福の楽隊みたい風鈴屋 中代 曜子

チリンチリン心地良い音を運びながら風鈴屋が通る。それを「祝福の楽隊みたい」だと詠んだところが秀抜。さまざまな風鈴が吊るされているから、音もそれぞれ微妙に違う。「祝福」と捉えた感性を祝福したい。

可惜夜のさざ波照らす夏の月 中村 敬子

可惜夜（あたらよ）は「惜しむべき夜」。さざ波を夏の月が照らしている、その眺めの良い光景をいつまでも見て居たという句である。素晴らしい、思い出の一夜を過ぎた作者。バルコニーに佇む姿が見えるようである。

時の日やケータイの鳴る待ちぼうけ 中村 東子

時の記念日は六月十日で時間の觀念の貴重さを訴える日。この句はその「時の日」に現代的なケータイを取り合わせた。戦後の『君の名は』の男女のすれ違いは、あの当時ケータイが在つたら回避できた筈だが、それを持つていても遅刻する人は居るもの。さんざ待たされた挙句ケータイへ「遅れる」の電話が入つたことへの怒り。

稚の爪桜貝の唄口遊ぶ 中村 幹子

幼児の小さな爪から淡紅色の桜貝を想い、口遊んだ唄が「美しき桜貝一つ 去りゆく君にささげん」。澄み切った声が聞こえてきそうだ。唄の中の桜貝なので季感は薄い、春ならではの明るさが感じられる。

見上ぐれば見下ろされたりえこの花 野沢 慶子

真下を向いて咲くえこの花の特徴をよく捉えている。小さな花ながら、かなり多く咲き下垂するので集团的に「見下ろされた」ように感じるのだろう。「見上ぐれば見下ろされたり」の語感が心地いい。

目の限り国防色に麦の熟る 橋本 恭子

戦前の昭和十五年に国民服令が公布され、国民服を着ることが義務付けられた。色は国防色で陸軍のカーキ色。掲出句では熟れた麦をその国防色に見立て戦争を詠む。麦の世界的生産地であるウクライナへの侵略問題が背景にある。国防色と詠まなくていい日が来るのを祈りたい。

祭囃子藍色の夜を満たしけり 長谷川菊男

「藍色の夜」の色濃い情緒は作者の心に満ちているもの。祭の鉦・太鼓・笛の御囃子連の音が夜になっても聞こえている。否、夜祭なのかもしれない。「満たしけり」

の充足感。淋しさを払拭するほど満たされたのだ。

起き抜けの新緑眩し日曜日 浜田 優子

新緑は眩しいもの。殊にこの句で提示されているように、日曜日の朝いつもよりゆつくり起きた時に目に映る新緑は美しい。睡眠が摂れ、疲れも取れて、心身ともに充実した朝を迎えての色鮮やかな一句。

蝌蚪の国へ都電とバスを乗り継いで 原田ミチ子

蝌蚪の池は「蝌蚪の国」とも詠む。蝌蚪の王国である。作者はその国を目ざし、わざわざ都電とバスを乗り継いで行ったという。飛行機とか潜水艦でもよさそうなものだが、都電とバスというのが良い。少々バタ臭くて些かの笑いを誘う。現実味のある乗り継ぎなので、容け入れやすい句となった。

窓若葉ひとり緑の繭のなか 平野 豊雄

実際の繭ではもちろん無い。部屋窓から若葉が見え若葉風が入り、若葉光が差し込んでいる状態を想像すれば、一人住むこの部屋は緑一色の繭のよう。作者はこの繭に自ら籠り、身も緑色に染まりながら更なる成長を待つ。若々しい第二の人生が始まるようでご同慶の至り。

紙風船後ろへ突いたわけではなく 福井 芳野

紙風船を手の平で突いていたら、風に吹かれて後ろに流されていった。それだけのことだが、この句では「後ろへ流れた」という報告っぽい言葉は用いず、「後ろへ突いたわけではなく」と詠んだ。それだけで紙風船の動きをしっかりと表現し得、心に残る句となった。

板チョコの斜めに割れて蝶生る 本多 遊子

真つ直ぐ割ろうとして、板チョコが斜めに割れた。失敗なのだが悪い気はせず、むしろその可笑しな割れ方をしたチョコの一片に愛おしさを感じる。掲出の句ではその割れた瞬間に蝶が生まれたという。手品みたいな句で意表を突かれた。蝶がこんな些細なことで生まれるとは。(じゃんけんで負けて虫に生まれたの 池田澄子)。

君の毒がからだに回る夏の夜 松本 余一

こういう甘く気障な言葉を弄するだけの力を持つ作者。ぼくでは絶対に作れない。「君の」と言いかけて言葉すべらせてしまうのがオチだ。別に毒婦ではなからうが、この君は作者を虜にするほどの魅力を持っているのだらう。「からだに回る」は苦しいというより、心地良い。要するに「のろけ」である。「夏の夜」はいい設定。

早苗饗や村の刺身は売り切れに 水谷 光子

さなぶりは田植が終ったあとの祝いであり豊作を願う行事であり、休日。会津地方では「早苗振り」と表記し、苗東二圃みほどを水で綺麗に洗い神棚に供える。また代掻きに使った馬や鋤を洗って御神酒を上げる。早苗振り休みには笹だんごを作り神棚に供え、ゆつくり労をねぎらって二三日身体を休めたという。掲出句ではその祝に刺身を用意しようとしたがすでに売り切れたこと。村を挙げての大切な早苗饗の様相がこの一句に活写された。

桐咲いて祖母のキセルと煙草盆 持田きよえ

桐が咲くと祖母を思い出す。桐と祖母の間に何かの縁があつたのだろうか。そして、祖母といえはキセルと煙草盆。これに尽きると、この句は語っている。昔の女性はキセルを結構吸っていた。誤りかもしれないが多くは厳しく生きる女性たちだったように記憶している。

不死男忌や缶切要らぬ缶ばかり 森尻 禮子

秋元不死男の有名な(鳥わたるこきく)と罐切れ(ば)を知らぬとこの句は解らない。敗戦後は法外な闇値で売られていた貴重な缶詰。缶切の必要な時代は去り、今はいとも簡単に缶が開く。不死男は戦前二年間弾圧で獄中に。出所後、東京三から秋元不死男に名を変えた。

舟涼し小名木川から大川へ

山田 雅子

芭蕉の旅が偲ばれる。隅田川に流れ込む小名木川。その小名木川の直ぐ上手に芭蕉庵の跡がある。芭蕉が「奥の細道」の漂泊の旅に出たのが三月二十七日（陽暦五月十六日）。今から六年前、芭蕉が出立したその日に、小名木川の高橋乗船場から芭蕉の旅を追体験するツアーに句仲間と参加し、屋形船で千住まで、掲出句の「舟涼し」を体験した。作者もその涼しさを満喫したことだろう。（雪敷ける町より高し小名木川 石田波郷）。

浅草で麒麟はアウエー缶ビール

横須賀智子

かつて浅草吾妻橋の墨田区側にアサヒビールの工場があつて大層賑わつた。石田波郷の『江東歳時記』には隅田ピアガーデンの賑わいが記され、河畔でビールを飲む女性の写真も載っている。現在は高層タワーと成り、展望のきく硝子張りの部屋でビールを飲むことができる。そのことを承知の上で読むと、掲出句の「アウエー」は面白い。圧倒的にアサヒの地盤だった浅草にキリンビールが進出してきたのである。でも、アサヒも負けてはいない。今号口絵のスーパードライを見てもらいたい。

栃の花土師器に染みる煮炊き痕跡

東 祥子

素焼の赤褐色の土師器は古墳時代以降、煮炊きや食器

に用いられた。縄文時代の主食は木の実、副食は魚類。木の実の中でも水に溶けにくい栃の実は、土器によつて加熱調理が確立した頃から食べられるようになったという。掲出句の「栃の花」と土師器にはそういう縁がある。煮炊きの痕が見えるとは相当永く使用されたようだ。

信州の青葉せまれる車窓かな

荒尾寿美江

車窓から見える青葉をどう表現するのか興味があつた。この句では「信州の青葉」と、列車が信州方面へ走っていることを先ず伝え成功している。「せまれる」のスピード感も見逃せない。中央本線であるなら小淵沢から先、八ヶ岳方面の青葉が美しいことだろう。

惜春や踏みゆく影のやはらかく

伊澤やすゑ

影が軟らかいとか硬いとか、そういうことを感じたことがないので、この句の「踏みゆく影のやはらかく」の肉体感覚に惹かれた。春を惜しむ心が、この微妙な影のありようを浮かび上げたのかもしれない。句の姿もよい。

合歡の花万葉人は恋に生き 石垣喜代子

確かに、万葉人のイメージは「恋に生き」である。勿論、恋どころではなく生きた人もいた筈だが、恋に生きることになっている。翻つて「昭和人」「平成人」「令和

人」というのは、あと千年二千年後には「何に生きて」と言われるだろうか。大らかであつたらう万葉人と比べ現代人は何に生きているのだろうか。そういうことが想われた合歡の花の一句。安らぎの一句。

じやがいもの花よと亡母の教へ今 市村 啓子

馬鈴薯の花である。その畑に咲く花を「あれがじやがいもの花よ」と亡き母が教えてくれた。季節がめぐり、その亡母の思い出を今度は眼前に咲く花が教えてくれた。母への深い感謝の気持ち「教へ今」に表されている。

かぎろへるものはまぼろし尼寺の跡 岩根 甲

陽炎の中に幻を見た。それは国分寺にかつて在った国分尼寺。鎌倉古道の先に講堂跡や尼坊跡などが遺つていて、天平時代を偲ぶよすがとなっている。この句、「かぎろへるものはまぼろし」のひらがな表記が句の内容とマッチし、心に残る。

缶蹴りの缶夕焼けに染まり落つ 牛込はる子

缶蹴りで蹴った缶が上に飛び、一瞬だが夕焼けに染まったのだ。そしてカランと落ちた。映画の『三丁目の夕日』のような昭和の時代の一場面が想われる。路地で誰もが遊んだ、缶蹴りの懐かしい一句。夕焼けが綺麗。

蚊遣火や灰の渦巻美しく 内海 範子

夏の残骸でタバコの形をしたままの灰を目にしたことがある。全く崩れていず、美しかった。この句の蚊遣香の灰の渦巻もさぞやと思ひ、やはりこれは「美しく」としか言えないだろうと、密かに思った。

洗濯は命もろとも夏初月 大下 壽櫻

「夏初月」は「なつはづき」。陽暦のほぼ五月にあたる。初夏の清らかな気候の中で作者も前向きに生きている。それは「命もろとも」に洗濯するという言葉から理解できる。心まで魂まで洗うという心意気に共鳴した。

若葉風太極拳の動き出す 太田 裕子

身体を鍛え精神を修養するための拳法。ゆるやかに円を描くその太極拳の動きは、こせこせした忙しさに埋没している現代人の目には眩しいばかり。若葉の下で風に吹かれ、風に随い、心地良いこと間違いなし。

葉桜やボールを高く子のせがむ 小河原政子

子どもへボールを放つて上げる。繰り返すうち確りと手で掴むことができ、そうするとともつと高くとせがむ。葉の繁った桜の木の梢の上になで高く放ると、走って行って見事キャッチ。「葉桜や」の切れが効いている。